

油画のマティエール

山 川 義 夫

種々の技法書がマティエールや油彩画の科学的な面にメスを入れ、作家や学生達の便に供されて居るものが可成り出版されて居り、私も三十年この方随分それらの著作の御世話に成ったが、併し中途半端な記述や納得出来難い内容があるのも事実であるので、私自身直接実験し、又作画に試用したりして結果もはっきりして居り且重点的に扱う要のあるものから取り上げたいと思います。

山下新太郎先生は著書「油絵の科学」に於て、油にて練りたる顔料即ち油絵具の起源を定めることは、従来学者が唱えたところよりも遙かに古く、蠟油を油類のうちに包含し得るならば、エジプトのミイラを納めた棺の蓋に画かれた、その中のミイラの肖像画の顔料は、当時のエジプト人が使用したゼラチンや、ミモザより採ったゴムを加へたのみでなく、恐らく蠟油をも使用したと思はれる。

歐洲においては十二世紀の頃既に油絵具の使用は相当廣範囲にわたり行はれた。故にファン・ネック兄弟が油絵具を發明したといふ説は俗論に過ぎない。

それでは何故にファン・ネック兄弟が油絵具を発見したかといはれるかといへば、それは従来の製法よりも早く乾く所の方法を採用し、その顔料特有の光沢を充分に發揮させることに成功したからである。なお特に留意すべきは、その頃の画家が主として板に画くに当り、ファン・ネックは板面に麻布を張り、その上に白亜(炭酸石灰)或は石膏(硫酸カルシウム)等を塗り、充分にその表面を研磨して、その上に画いたからである。これは恰も日本の漆絵の下地塗りと、その基を一にしてゐる。これ等の方法は歴史家の説によると、その頃支那元朝に奉仕したフランドルのモアーヌ、即ち修道士によって支那漆絵画法がファン・ネックに伝授されたるためであるとされる。この経緯は「油絵の科学」にくわしいので興味のある方は一読されるとよいと思うが、兎に角東洋からフランドルに油彩画の技法が、それも速かに油絵具を乾燥させると共に何時迄もその色艶を保ち、後世の画家の作品が一部の例外を除いて、変色、亀裂、老人の肌の様な艶引きのマティエールから逃れられない

のと裏腹に五百年を経た現在も作画当時の張りのある画肌を今後も残し続け得ると云う事はまさしく、芸術は永遠也と云い得るのであろうが、表現の自由や、創造的で独自の個性を発揮させ様とあせる余りに自己の使用する画材、基底材、展色剤、その他、色々と作画上の表現を手助けして呉れる筈のものが、使用する材料や使用法のあやまった使い方の為に、画家の没後は云うに及ばず生前既に変色、亀裂、剝落を見ると他人の作品乍ら痛々しく、殊に立派な作家の遺作展等で、それらに御目にかかるのは堪え難い事である。

安井曾太郎の名作「金蓉」は1934年に制作され、素晴らしい出来栄と、生じた亀裂が一層此の作品を有名にした感が無くもないが、作者は金蓉の「支那服の色が実に美しく、幾度も、幾度も塗ったことは覚えている。其の後その塗り重ねた支那服のところだけ、絵の具に随分亀裂が出来た。それは、乾のおそい絵の具の充分にかわいていない上に、乾の早い絵の具を塗った為だということである。余りひどく割れていたので、一度絵の具でつくらって見たが、やはり又もと通りに割れてしまった。」と述懐されているが、亀裂の原因は全くその通りであるが、他にも理由はある様で、後程此の問題をとり上げる事とする。

I. 油類（溶剤・展色剤）

油画のマティエールにとって最も重要なものは、油であって（一応樹脂等も含めて）、此の油が不適當であったり、使用法が異なると結果として、画肌は良いものから悪いもの迄様々の変化を見せて呉れる。ファン・アイクの作品の様に五百年経た今でも極めて良好な保存状態を示すものから、描き上げた数日後に既に色価のくろいが分り、部分的に、或いは大部分が、かさついた、貧血症の顔色の様相を呈するものや、亀裂・剝落に至る迄、実に多種多様の画肌を生むに至るのだ。

油画の材料に関する解説書の中にさえ著者の誤解を見出す事がある為に、それらの書物を手掛りに作画生活を続ける人達が問題った知識を元に仕事をし、結果として作品の損傷・破壊を招くとしたら、悲痛此の上なく、到底芸術に永遠の生命等覚束無いと云はねばならない。

Linseed Oil Huile de Lin 〈亜麻仁油〉

どうも我国に於てはリンシード・オイルはポッピー・オイルよりも劣ったものとして考えられ、メーカーが油絵具を練り合わせるのに大部分がポッピー・オイル

油画のマティエール(山川義夫)

が用いられ、素人が安直に使用出来る様に種々のオイル(乾性油・揮発性油・樹脂等)を混合した溶剤には、リンシード・オイルを加えたものとポッピー・オイルを加えたものがあるが、専門家も素人もポッピー・オイルが混入されている溶き油を好む人が多い様で問題であろう。

リンシードは白い絵の具を黄色く着色し、雪の絵は黄色ぼく成って良くないと云う作家やメーカーの説明である。勿論リンシードの黄変は事実あるのだが、それは作品を明るい個処に掲げておく等で防ぐ事は可能で、若し暗い処にしまっておいた作品が黄変したとしても、その作品を窓際の明るい場所に置いたならば元の色彩に戻ると云う性質は、特別困る欠点ではない。

ポッピー・オイルとても絶対に黄変しないと云う保障があるわけではなく、幾分は黄変をまぬかれないのである。

更にリンシード・オイルに種々の加工・処理を施せば決して黄変する事が無いのを数種の実験で確かめ得る事が出来た。

亜麻仁油は、亜麻の種に30%~40%含まれている琥珀色の乾性油で、原産地はコーカサス地方やアジアで四・五千年来アッシリアやエジプトでも栽培され、北の方でも生産される様になり、北国の寒冷地でとれる亜麻の繊維は南の方のものより長いものが得られ、織物には向いて居るが、採油量が少なく、特に、乾燥性が悪いのが欠点で、オランダで生産された亜麻の種子から採搾されたものが最も良質で、且有名であるが、アルゼンチンのラ・プラタとインドのボンベイの製品も中々良いものであると云はれている。

亜麻仁油の製法は、亜麻の種を良く乾燥させ、その後かるく炒ったものを石臼で強く圧搾して得られたものが良質だが、メーカーでは多くの場合、蒸気で処理し、無駄なく搾り採っているが、此の方法では同一分量の種子から、より大量に採搾されるが乾燥が悪く、不都合である。

ポッピー・オイルに比べて黄色味が強いのが欠点だが脱色する方法もあり、リノキシンの含有量が多いので絵の具のモチは良く、又乾燥性もリンシードの方がポッピーよりすぐれている。

Poppy Oil Huile d' CEillette <罌粟油>

黒罌粟の種子の胚乳を圧搾して得られる。ポッピー・オイルの方がリンシードよ

り白いのが好まれる様だが、特に白色や明るい色調の顔料に使用されるのが良いと、メーカーや技術書ではすすめている。

併しリノキシンの含有量もリンシードより少く、乾燥に要する時間は長く、耐久性も劣る此の油をメーカーが使用するのには不思議な事であるが、黒とかローズ・マダー等に限ってリンシードと練り合せている事は多い様で、さもないと此れらは何時迄も乾かず、べたべたしている。

オランダのタレンス社はポッピーを強く非難し、乾燥が特に悪い点と、耐久性の悪さを挙げている。

更にケシ油を使用した絵の具はアマニ油で練った顔料よりも絵の具の層に亀裂が生じ易い欠点がある。

最も恐るべくは、ポッピー・オイルと称して、その実サフラワ油（紅花油）が用いられて居る様で、未覚認である危い油を練り合せ剤に用いるのは全く困った事である。何故そうなって来たのかと云うと、白ケシからは阿片がとれる為に、ケシの栽培は厳しく取り締られて居り、産油量もままならぬのだろうが、それであるならば是非リンシード・オイルを使用してほしいものである。

〈その他の乾性油〉

胡桃油は昔は用いられた様だが、近頃入手し難くなって居り、未だ使用していないので後日にゆずる事とする。紅花油、大豆油も同様である。

〈加工乾性油〉

西洋のメーカーでは乾性油に、脱色・加熱・添加等に依り数多くの溶剤・メデイウムが製造販売されている。私は亜麻仁油を元に作った二、三を試みて得たものを述べる事とする。

㊦ Linseed Oil, Refined

英国ニュートン社の製品で、人工的にアルカリで処理して精製し、遊離酸や膠物質を沈澱除去してから、活性炭や酸性白土で脱酸脱色し、濾過したものである。

私はこれでチタニウム・ホワイトと操り合わせて見たが、暗い箱の中では矢張り亜麻仁油の欠点である黄ばむ現象が見られた、併し窓辺の明るい処に放置すると、矢張り黄色味は薄れて来るのが確認出来た。

㊦ Linseed Oil Sun Bleached

油画のマティエール(山川義夫)

ニュートン社のもので、此れは太陽光線で漂白したアマニ油で、全工程が天然方法に依り、人工乾燥材は一切用いられない、水と太陽光線の活動丈で精製漂白された、極めて正統的で信頼のおけるものである。

これもチタニウム・ホワイトと混ぜて、試みた結果、暗所に二年半程入れて見たが全然黄ばみは無く、瓶に入っている状態では黄色いアマニ油が、使用時には白色顔料でも、いささかの心配もないのは大いに心強く思った。これは他の樹脂等と混ぜて展色剤(溶剤)を作るのに誠に好都合な製品である。一切の乾燥材(鉛・マンガ・コバルト等)を含んでいない。

㊦ Strong Drying Oil No.2

コバルト混合物とアマニ油を加熱処理して作られる。No.1より淡色で流動性にも富んで居り、不純な空気にさらしてもNo. 1の様に黒ずむ恐れはないが、コバルトは性質上、絵具の表面の乾燥を早めるので厚塗りを避けた方が良く、薄塗りが無難の様である。瓶の底に沈澱物を生ずるが、使用時に瓶を振ると元に戻り、制作には悪影響はなく、ホワイトと練り合わせて、暗所に二年半入れた儘でも白さを維持していた。

㊦ Stand linseed oil

コバルトブルー、チタニウムホワイト、アイボリーブラックにニュートンのスタンドオイルを混ぜて見た結果、兎に角チョーキングの嫌な思いをさせられるチタンやコバルトが信じ難い様な色艶を発揮し、殊に薄く絵具を塗ったコバルトブルーは透明に輝き、エマイユの様な効果を示した。

アイボリーブラックとて例外ではなく、黒い色の魅力を充分確認させて呉れるもので、ヴェネツィア・テレピン・バルサムと共に最も貴重な展色剤の一つである。

このスタンド・オイルは真空の状態で、つまり空気を断っておいて、300°C前後に数時間加熱し、重合が行はれたもので、リンシード・オイルの分子はまとまって大分子を作り、この大分子は、亀裂・黄化・分解等と云った化学作用を起し難くなるもので、皮模は生のリンシードオイルやボイル油等よりも非常に丈夫で乾燥後も柔軟性を保ち、弾性に富んで居る。

スタンドオイルの欠点は乾燥がおそい事とされているが、私の試用では4日で指觸乾燥し、3日では指觸乾燥に近い事が識別された。この乾燥状態では特別乾きが

悪い展色剤でもないと思うが、或いはメーカーでは乾燥剤を混入しているのかも知れない。

又、更に私はチタンとスタンドオイルに極少量（2%位）のクールトレのシッカチーフを混ぜた結果2日半で指觸乾燥し、絵具の厚い部分も無事で、しわ等出来なかったが、シッカチーフの分量を増やし、チタン白の色が少し、赤茶けた色に成る位に混入すると勿論1日で乾燥したが絵の具の厚い部分は歟に成ったが、薄い個処は若干着色——白色の暖色調は認められるものの、純白を求めない場合には差しつかえない程度である。

併し、可成り濃密で粘りが強く、筆の動きも思うに任せぬので、テレピン等で割って使はないと都合が悪いが、タッチを消してなめらかなマティエールを望む向きには恰好なものとする。

⑤ STAND OIL

我国では残念乍ら欧洲諸国の画材メーカーの様に、種々加工した乾性油や、メジウムを製造販売の例は甚だ少ないが、シマモト画材は其の真面目な努力をして居る数少ないメーカーの一つであり、数種の展色剤を試用してみた。

ニュートンとシマモトの工場や機械等を見たわけではないが、私自身が画布上に試みた結果は、シマモトのスタンド・オイルも、ニュートンのスタンド・オイルに近似しているのを認める事が出来た。

甚だ光沢に富み、乾燥後も塗模の柔軟性がある等も同様であるが、シマモト製の方が極くわずかだが乾きがおそく、チタニウムホワイトに混ぜた結果は、4日半で薄い処が指觸乾燥して居るので差は半日であるが、乾燥材の混用方法でこの差は無視出来る程度と云って良いかと思う。

なんと云ってもチョーキングし易い、チタン、コバルト、オキサイド・オブ・クロミウム等や暗色調には好都合な展色剤である。

⑤ BOILED LINSEED OIL

リンシードオイルを熱処理したり、脱色してあるが、チタニウムホワイトと混ぜた結果は黄ばむのを見た。コバルト・ブルーでは差しつかえなかったし、適度の光沢があり、余り強度の光沢を望まぬ者にはスタンドオイルよりも却って使い易いかもしれない。

油画のマティエール(山川義夫)

ボイル油は生のリンシードより、ずっと早く空気中の酸素と結合して乾燥も良く、塗膜が出来る時間も早いし丈夫でもある。

又、スタンドオイルに比べて、ずっと粘り気は少く、生のオイルに近いので此の点は使い易い材料と云える。

⑤ Sun Bleached LINSEED OIL

画家が良く窓辺にリンシードの瓶を置いて日光に晒して居るが、シマモト製を試した処、チタニウム・ホワイトは少し黄色味を帯びて、スタンド・オイルの白さには及ばないが、ボイル油程黄化せず、無視出来る程度で、温和な半光沢に仕上がるが、コバルト・ブルーは艶引けが認められる。

アイボリー・ブラックでは柔かい光沢があり、自然で上品な黒色調が得られた。

亜麻仁油を太陽の光に当てておけば日光の作用で次第に油が澄んで来るが三月が他の月よりも紫外線が最も豊富なので、この月が効果的であるが長期間晒しておくのに越した事はない。

この製品は乾燥材等、一切の人工的な加工が為されていないので、如何なる顔料にも安心して使い得る長所がある。

〈樹脂〉

絵の具の練り合わせ剤としても展色剤としても、最も重要で興味のあるのが樹脂であり、ファン・アイクの作品のもちの良さも、結局樹脂に負う処が大きいのは既に識者の述べる処である。

絵の具の色層の固着性、絵の具が乾いてからでも、その艶を保持し、色価・調子をくずさない等、数々の長所を持つが、其の二、三について特性を調べ、次いで樹脂と加熱した亜麻仁油や乾燥材を混ぜたメジューム等の製品に当る事とした。

▶ 琥珀

コハクは硬い天然樹脂は元より、あらゆる樹脂の中で一番硬く、堅牢性や純粋性では比類のないもので、ファン・アイクもコハクを使用したのではないかと推量する向きも多いが、併し確実に立証されたわけでもなく、理想的と思はれる此の樹脂が、現代の科学を以てしても組成をこわす事なく、溶解することが出来ないと云う。

話は変ってヴァイオリンのストウラディヴァリウスであるが、この楽器の秘密は作者の木工技術と云うよりは、明らかにニスにあり、ファン・アイクとクレモンの

絃楽器作者たちの同一の特徴、ニスはやわらかい同一の輝き、同じ堅牢性、同じ透明性、どうもコハクの硬いニスをういたとより思われないと云う。ブロックス (Blockx) がコハクを分解させずに溶解出来たとして、このコハクワニス販売しているが未だに手に入れる事が出来ず、今後の楽しい課題として期待している。

▶ Copal コーパル

種々の産地があるが、ほとんどアフリカ産で、硬い樹脂だが、これを絵の具に用いると固着力も大変良く、艶もあり、拡大して見ると溶岩の状態を呈して居り、作品の保存上から望ましいものの一つであるが、絵の具と練り合わせる際に良く均一に混ぜないと部分的に絵の具が収縮して亀裂を生づる恐れがあるので注意するのに越した事はない。

コーパルは顔料と練り合わせる丈でなく、展色剤としても、又完成した画面に保護用としても使用出来るが、作画時に用いる場合、後述のヴェネツィア・テレピン・バルサムを併用した方が良いと思う。

▶ Mastic マスティック

マスティックは乳香とよばれ、良い匂いがし、少しだが芳香を帯びている。涙滴状で色がうすく、透明なものがある。これは柔軟な樹脂で、溶剤や画面保護用のニスにも用いられるが、その場合、最初のワニスだけはコーパルの様な固い樹脂質のワニス良く、第二層にマスティックやダマール樹脂を用いるのが一般的である。

▶ Dammar ダマール

ダマラ松から採った軟かい樹脂、及びその同類のもので、マスティック同様、展色剤にもタブローにも使用出来る。色は白か、うすいコハク色。

▶ Venetian turpentine Balsam ヴェネツィア・テレピン・バルサム

これは唐松 (Pinus larix) から得られるが、誠に驚くべき樹脂で、絵の具に混ぜて使用すると乾燥後も全く濡れている様な状態の色艶があり、指で觸れて見て、始めて乾燥しているのが分る程であり、艶引けを恐れる人には大変良い樹脂だが、只甚だ乾燥が遅く、その為に、早い乾燥を望むのなら何か乾燥剤を併用せねばならないかと思う。

逆にその遅い乾燥性を利用して、絵の上層・仕上げの段階では画面が濡れた儘、つまり訂正の為の拭き取りをし乍ら制作を続け得るかとも考え得るが、如何なもの

であろうか。

コーパルは硬くて堅固な色層を作るとは云え、硬さ丈では、或いは脆さを伴う恐れを無しとしないが、此の場合、柔軟なヴェネツィア・テレピン・バルサムの混用が、画面の色層を堅固で且柔軟な理想的なものに為し得る様に思われるのだが。

何よりも最高の光沢が特徴で、各自の望む光沢の度合に従って此の樹脂を適量使用すれば、それに応じた結果が得られるし、又、使用する分量の如何で乾燥時間の長短も自ら決ってくる事であろう。

このバルサムは唐松の幹に刻み目をつけて採取されるが、夏期に唐松から自然に流れ出る（刻み目をつけず）ものもある。

この粘性は、冬の低温では粘りが強く、バルサム状で、夏の高温ではシロップ状に成る。

▶シェラック

シェラックがフィキサティブに用いられて居り、木炭等の定着に良く使用されて居るので是非とり上げなければならないと思う。

これは蠟と色素を含んでいる樹脂で、ある昆虫から取れるものだが、アルコールには溶解してもテレピン精油には、ほとんど完全に溶解しない。それで油彩画のデッサンを木炭で描いて、シェラックとアルコールのフィキサティブで定着する事は絶対に避けなければならない。つまり、キャンヴァスの地と油絵具の中間に、両者を隔絶する物質が入ると絵の具の固着力をさまたげてしまうから。

多くの技法書に木炭で描いたデッサンをフィキサティブで定着して油画を描く様に述べてあるのは危険な事だと思う。

最近では合成樹脂を使用したフィキサティブが製品化されて来たが実験の結果矢張り画布から絵の具がはがれてしまった。

〈揮発性油〉

植物性のテレピン精油と鉱物性のペトロールのエッセンスが一般的だが、どうもペトロールの方が良質だと思われ易く、私も近年迄ペトロールばかり使用して来たが、或る疑問を持って以来、現在ではテレピン精油のみを制作時に使用し、ペトロールはもっぱら筆洗器用と成っている。

ペトロールに対する疑問とは、タレンス社のシッカチーフ・ダークをペトロール

で割って使用した際に白濁した事があり、ある樹脂を溶かさないうで沈澱させてしまいう欠点があった。

絵の具の色層の固着を強め、その色艶を保つ樹脂も、ペトロールと共に用いる際に、白濁・沈澱してしまうのでは、樹脂の効用にも影響があるであろうし、ペトロールや樹脂を温めて混合すると白濁せずに済む様だが、わざわざ厄介な事をせずとも、テレピン精油は具合良く混合して呉れるのである。

尤もテレピン油にも欠点はある、蓋をしつかりしない瓶の中等、空気と觸れるままにしておくと、ベトベトして、樹脂化し此れは決して乾かなくなってしまう。

要するに小瓶を使用し、一旦キャップをあけたら直ちに使いきるか、油壺に出して余ったテレピン精油は、惜気なく捨て去る事で解決されるだろう。

ペトロールもダマール樹脂等とは良くなじむので、ヴィベールの処方でルフラン社から出しているバンドルやルツシェは、ペトロールと混合出来る。

ペトロールは瓶の蓋をあけたままにしても、揮発して、分量は減るがベトベトに成らないし、その成分には全く変化は無く、滲透性があるので、絵の具の下層迄しっかりと、深く滲透すると云う長所があり、テレピン精油より乾燥時間が遅く、濡れ色を見乍ら制作を進めるのには好都合かと思はれる。

更に乾くと完全に揮発して、何ものをも残さないと云う性質がある。

▶アスピック精油

雄ラヴェンダーの精油であるが、高価で、強い匂いを持つ此の精油は、是非共これを使用せずとも、テレピン精油・ペトロールの何れかで間に合う現在、余り必要性を認めないが、オランダのタレンス社では「作品の耐久性を保証出来ない悪い残滓を残す」と云って居る。

併し、油画の修復技術に、欧州の美術館では使用されて居る由であるが、これとてもテレピン精油に依る清拭を充分に行えば、悪影響なしで済まされる。

〈各種メディウム・展色剤〉

吾国に油画技法が西洋から伝えられ、ようやく百年を経過し、油絵具を製造・販売する業者も沢山あり、絵の具に使用されている顔料を試験してみて、殆ど純粹で良質なものを扱い、悪い原料等を使用している例は稀により見られない様で、結構な事ではあるが、オイル関係の工夫改善の努力にとぼしく、極く一部のメーカーを

除いては、オイルは元より、樹脂・乾燥材・精油等を種々添加・加工したメディウム・展色剤、更に練り合わせ剤等に於て、未だに遠く欧州のメーカーに及ばないのが実情で、誠に残念である。

欧州の画材店では、種々のメディウム類が製造・販売されて居るが、全部を一度に試用する事は不可能で、目下、私にとって興味のあるものから、その試用結果を述べる事とする。

① Me'dium Flamand (フレミニッシュ・メディウム) メディウム・フラマン

ルフラン・ブルジョア社から出ている、チューブ容りの此のメディウムは加熱処理した乾性油・マスティック樹脂・鉛が混合されているが、非常に絵の具の光沢・透明感が出るのと、加熱処理したオイルと鉛の作用で甚だ乾燥が早く、絵の具と此のメディウムをほぼ等量用いると、数時間後には固りつつあるのが分る程で、翌日は指觸乾燥する早さである。乾燥後も未だ濡れている様な絵の具の色艶があり、特に黒や暗い色調の部分に強い効果を発揮するが、又、チタニウム・ホワイトやオキサイド・オブ・クロミウムの様な艶引けして、カサカサの画肌になる顔料には好都合かと思う。

問題は、鉛を含むので、鉛と合うと黒変したり、色を無くする顔料——カドミウムの淡い明るい黄色、ウルトラマリン、ローズ・マダー等であるが、これ等の絵の具とメディウム・フラマンを等量混ぜて、約一年間、その経過を良く観察したが、全然変色や退色は見られず、鉛の害は、鉛の分量が或る線を越えなければ心配が無い事が判明した。

但しシルヴァー・ホワイトは原料が鉛なので、前記の絵の具と混ぜぬ方が良い事は勿論であろう。

このメディウムはチューブからしぼり出すと、ゼリー状を呈しているが、筆で動かすと容易に液化し、絵の具と良く混じり合い、甚だ使い易い。使用してある樹脂がマスティックなので絵の具の乾燥後も、その色層・塗膜は柔軟である。

但し、此のメディウムと絵の具を混ぜた色層を余り厚くすると、厚い部分が歟になるので注意する必要を認めた。

② Me'dium Vénitien メディウム ベニシャン

矢張り、ルフランの製品であり、メディウム・フラマンと似ているが、これには

密蝋が加えられている。このメディウムの方が光沢が少なく、温和な絵の具の艶が得られるのと、或分量を越さない限り、危くないと云う鉛も、これに含まれている密蝋が、絵の具の粒子を保護する役割りをはたし、鉛の作用を心配する人には此のメディウムの方が安心だと思はれる。

絵の具の色層を可成り厚めにしても、メディウム・フラマンの様に歎にならないが、極度な厚塗りはマティエールの健康の為には避けた方が良い様に思う。

野外でパレットに出して使用する際に、メディウム・フラマンの方が幾分流れ易く、その点、メディウム・ヴェニシアンは筆ですくい取るのに都合の良いゼリー状を呈して居ると云える。

両者共、甚だ乾燥も早く、寒い冬でも制作を続けるのが容易であり、絵の具の艶も、最高の光沢（メディウム・フラマン）から温和な半光沢（メディウム・ヴェニシアン）迄、各自の好みに合わせて選沢出来る事と、チューブ入りの為、キャップをきちんと締めてさえおけば、チューブの中で固まる恐れもなく、必要量を自由に加減して、パレットにしばらく出して使用出来るので誠に好都合で、出来れば吾国のメーカーも斯様なメディウムを製造してほしいものとする次第である。

① MEDIUM LAQUE メディウム・ラック

このメディウムは強い光沢があり、絵の具の表層が非常になめらかで、つるつるしたマティエールが得られる。

併し何処となく冷やかで、又、無稜的な光沢であり、何となく見る者の気持に疎外感を与え、クールでドライなマティエールが得られる。従って好みが二分すると思うが、ドライな抽象画には或いは適して居るかも知れない。更に柔軟で丈夫な色層が得られる。

乾燥には余り期待出来ないので、その点も心得る要があるし、過度の厚塗りは大きな歎が出来るので用心した方が良い。

① MEDIUM CRISTAL メディウム・クリスタル

これはあらゆるメディウムの中で一番タッチの効果が出るもので、盛り上げたり、変化のあるマティエールを望む場合に適している。絵の具にこのメディウムを㍻程加えて、充分効果があり、鋭いタッチが出せる。乾燥後は落ちついた弱い光沢が得られるが、これも乾燥性は良いとは云えないが、歎も出来ず、鋭いタッチが生かさ

れると云うのが、このメEDIUMの特徴である。塗膜は固さと柔軟さが得られるので、作品の保存上も良さそうである。

① MEDIUM SICCATIF メEDIUM・シッカティブ

名称のシッカティブと云うのは関係がなく、絵の具の色艶を良くし、多量に使用(絵の具との混合比)すると最高の透明性のマティエールが得られ、恰も、陶器の肌を見る様な具合にも為し得る。

タッチも良く出るし、混ぜられた絵の具の艶を増す働きもあり、可成り厚く用いても歎も出ないのは好都合だが、タッチの鋭さに於いては、メEDIUM・クリスタルに劣り、光沢に於ては、優れた結果を示した。

これは重合した亜麻仁油と合成樹脂が基礎と成って居る、ペースト状のメEDIUMだが、乾燥後の画肌は堅固な感じに成った。

② WinGel ウイン・ゲル

ニュートン社の製品で、アルキッド樹脂と乾性油でつくられて居り、ゼラチン状だが、ナイフや筆で動かすと流動体になる。

乾燥性も中々良いので、シッカティブとして使用出来るし、耐候性も高く、厚く塗った膜は縮まないし、薄い膜でも疲労や弱まったりはしないとメーカーや画材店では推賞して居るが、私のテストでは、濃度や練りの具合に均一性と云う点で難点があり、比較的固めの部分と液状に近い柔らかい部分とが、使用時に異和感を与え、少々不快であるし、極度の厚塗りでは歎に成り、チタニウム、ホワイトは艶がなく、使用時には各自の試験が必要かと思った。

③ Oleopast オレオパスト

厚塗り用のメEDIUMで、ゼリー状であり、ベースはアルキッド樹脂を油加工したもので、高級酸化シリコンも併用していて、甚だ乾燥も早く、絵の具に混ぜて一日で指觸乾燥し、 $\frac{1}{2}$ 混ぜた丈でも2日で指觸乾燥した。——(除く、アイボリ、ブラック)

このメEDIUMは絵の具の厚さに関係なく、厚く塗っても、薄く塗っても均一に乾くし、これを用いて作画した上にも、種々のバニス(艶出、艶なし)を普通に用いる事が出来る。

何よりも厚く盛り上げて描く者には、大変都合の良いメEDIUMで、屋外にさら

される作品に特に適しているので、丈夫さの点でも申し分ないと思う。

タッチも、ルフランのメディウム・クリスタル程、鋭くないが、実用上充分であり、ウイン・ゲルと比較して遙かに使い易い。

ただし、絵の具に含まれているオイルが多過ぎる状態の絵の具に使用して極度の厚塗りを試みると、矢張り歎が出来る。

ミノー社製のシルバー・ホワイト、ジンク・ホワイト、フレーク・ホワイト、と混ぜて使用した結果、可成りの厚塗りだが、全く歎は出来ず、タッチの鋭さも実用上充分であり、好結果を得られたが、ホワイトの艶がなくなり、此のメディウムを多く混ぜるとホワイトに少し、暖色調の色味が付くが、実用上、無視出来る程度で、日光に当てたら此の暖色調も減少した。

このメディウムは乾燥が大変良いので、乾燥剤として使用する事も可能で、又、ルフランのメディウム・フラマンの様な強い光沢が出ないで、温和な半光沢であり、却って愛好者が増える様にも思われるが、吾国のメーカーにも是非製造してほしい物の一つである。

① Venetian Turpentine ヴェネツィア・テレピン・バルサム

このバルサムは、唐松 (Pinus larix) の樹皮に刻みを入れて採取する。寒冷時にはバルサム状の著しい粘着力を持ち、夏期にはシロップ状に成る。美しいコハク色で、オランダのタレンス社のこの製品は、ルフラン・ブルジョア社の、グザヴィエ・ド・ラングレの処方による稀釈した製品と異なり、可成りねばっこいが、余分なテレピン精油を混ぜてないので、絵の具を固い状態で用いる際は、却って好都合かと思う。

光沢の強い種々のメディウム・展色剤の中でも、ヴェネツィア・テレピン・バルサムは最高の輝き、光沢があり、絵の具が濡れているか、乾いているのかは、手で觸れて見てやっと分る程の艶を発揮する。

名称の為に誤解されると困るが、一般に用いられている、テレピン精油とは全く別のもので、テレピン精油は、マリティム松の松脂からとったもので、ヴェネツィア・テレピン・バルサムは唐松から出る天然のバルサムである事を知る要がある。

ヴェネツィア・テレピンは繊細な描き込みと、色をあせさずに、ぬれた儘、塗り重ねる事が出来、エマイユの様な輝かしいマティエールを作る事が出来る。

又、絵の具に柔軟性や弾力性を加味する働きがあるので、硬いコーパルと併用す

ると、双方の長所、即ち、硬くしっかり固着する、コーパルと、これに柔軟性を付加するヴェネツィア・テレピン・バルサムは申し分のない相手であると思はれる。

但し、乾燥性は可成り遅いので、余り大量に加えぬ事と、光沢を最高に発揮させる為に多量にこのバルサムを使用する場合に、乾燥剤を併用する事である。絵の具の色を変色させる恐れがあると云はれている、クールトレのシッカティブにしても、総量の3%~5%の範囲であれば、硫化物を含む顔料——カドミウム黄、ウルトラマリン、又、鉛とは具合が悪いと云はれる、ローズ・マダー等も変・退色の恐れなしに、乾燥丈早める事が出来るので何等差しつかえない。

① Medium à la térébenthine de Vénise ヴェネツィア・テレピン・メディウム

ルフラン社のこの製品は、レンヌ美術学校教授グザヴィエ・ド・ラングレ氏の処方依るもので、稀釈されて居り、前記ターレンス社のバルサム状の製品と比較すると、甚だ流動性に富み、作画に筆を主に用い、色層が比較的薄い技法の人には却って、ねばつかない丈、使い易いかも知れない。

ヴェネツィア・テレピンの特徴は前述のターレンス社のバルサム状の製品で種々述べたので繰り返す必要がないが、稀釈されて居るとは云え、ほぼ同量の、テレピン精油か、アスピック精油で割った方が良く、又、硬いコーパル樹脂を含むメディウム等と混ぜて使用する事で、一層効果は挙げると云える。

② TRANSPARENT MEDIUM 透明メディウム

国産のメディウムでは大分以前からホルベイン社から出ていて、私も10年程使用したものだが、絵の具と等量混ぜると翌日は指觸乾燥するので、厚塗りの画面には好都合で、搬入間際の作品にも大変に便利だったが、合成樹脂にパラフィンが入っているので、乾燥後は幾分白っぽくなり、戸外の制作では、日光に当たると柔かく、腰がなくなるので室内制作用に用いて特徴が発揮される。

併し、厚くつけた絵の具が時間と共に収縮し、やせて、タッチも薄く成る傾向がある。甚だ早く乾燥するが、鉛の成分等は含まれていないので、その向きを恐れる人には、何如なる顔料とも混ぜ得るので心配はなく、画面の艶を消したい用途にも好適かと思はれる。

このメディウムを使用して、絵の具が剥落して困る旨、使用者から聞いた事があるが、それは加筆時に(ナイフ使用なら、なおさら)ヴェルニ・ア・ルツシェーを吹

きかけてから制作を続行する事で、完全に避けられるのでは是非実行しなければならないと思はれる。

タッチも比較的鋭く出やすいものである。

⑨ STRONG MEDIUM

前記透明メディウムが白っぽく、艶消し調に仕上げるのに対し、ホルベイン社の新しい、このストロング・メディウムは光沢もあり、鋭いタッチも出し易く、殊に普通、塗り重ねの際に上層の絵の具のオイルが、下層の絵の具に吸収されてカサカサに成り易いが、ストロング・メディウムを $\frac{1}{3}$ 以上絵の具と混ぜて使用した結果、色艶も失はれず好都合であった。

ただし、合成樹脂が主原料だが、天然樹脂の持つ色艶と比較して、何とはなしに冷調を帯びて居り、この点は混合直後から乾燥時迄同様である。

同社の透明メディウムの様に早い乾燥性はなく、ルフラン社のメディウム・クリスタル等の様に乾きはおそいが、鋭いタッチが出せるのと、クールな艶が特徴だが、塗膜や絵の具の層は堅固で弾性にも富み、興味深いメディウムと云える。

出来得れば斯様な性質に加えて、乾燥の早いメディウムを作り出してほしいものである。約4日で厚塗りでも指觸乾燥をした。

⑩ クリスタル・メディウム

クサカベ製のこのメディウムは、ホルベインの透明メディウムと似ているが、乾燥はおそく、矢張りパラフィンの為に、直射日光や高温に弱く、画面は白っぽく成る等同様であった。

⑪ Siccatif de Harlem Duroziez シッカチーフ ド アルレム デュロジエ

ルフラン・ブルジョア社から出ているこの溶剤は以前、パリのデュロジエ商会から出ていたものが、今はルフランから発売されているが、世界的に愛好者が多い様に見受けられ、我国でも入手し難い画材の一つに成っている。

硬いコーパル樹脂にスタンド・オイルを加えてある為に、フラマン・シッカチーフより淡色であり、色が明るい事から使用者が多い事も考えられる。

コーパルの特質が作用して堅固な画肌が得られるが、シッカチーフと云う名前に期待しても無理で、含まれている樹脂に依って絵の具がしまる程度であり、乾燥は余り早くない。此の溶剤の特長を生かす為には、チューブ容りの絵の具に含まれて

いる生の乾性油を取り出す事で、紙上に絵の具をしぼり出してから良く混ぜ合わせる必要がある。チューブには多くの場合、含有する生の油量が多過ぎるのは困った事である。

㊦ Siccatif Flamand

前記のハーレムよりもこのフラマンの方が一層、コーパルが多く、濃縮されて居り、従って色も濃い為か、画材店では、この方の在庫が多い様で、スタンド・オイルやテレピン精油で割って使用すれば色も淡くなり、ハーレムとより似て来る。

兎に角、コーパルを混入すると溶岩の様な堅固さを作る事が出来るが、絵の具と混ぜる際に成るべく均一化させないと、収縮する際に亀裂等の危険もあり得るので注意が肝心で、この硬いコーパルを多く含んだフラマンにヴェネチアン・ターペنتينを加える事で、色艶を大変豊かにし、且柔軟性が付加されるので申し分ない溶剤の一つと成り得る。

㊧ Copal Oil Medium No.1 コーパル・オイル・メディウムNo.1

英国ニュートン社のこの製品も、フランス・ルフラン社の上記の二製品同様、甚だ良い製品で、コーパル樹脂・リンシード・テレピン油がまづつ混合されて居り、殊にテレピンで割って描く際にはこのNo.1が都合が良く、ペトロールでは、温ためて用いないと良く混じらないので注意が必要である。

多量に用いるとチョーキングし易い絵の具でも艶が出て好結果を得たし、画布にしっかり固着するのは誠に有難い。

No.2の方はテレピン精油の代りにペトロールが加えられてある丈の異いだが、ペトロールはどうも硬い樹脂とのなじみが悪く、白くにごったり、沈澱するので、それが画面に於ても行はれる事も想像されるので、ペトロールを加熱すると解決される様だが、危険性もあり、面倒でもあるし、敬遠する次第である。

㊨ GLOSSY VARNISH

クサカベ(アサヒ)で近頃出されたこのワニスは、合成樹脂製で流動的な液体で、従来のパンドル同様にも使えるとの事だが、アイボリー・ブラックは良い艶が得られ、チタニウム・ホワイトも、コバルト・ブルーも共に半光沢で、チョーキングの欠点は補はれたが、コバルトの場合はもう少し、艶がほしい感じであった。

大変ユニークなのは指觸乾燥した画面に直ちに用いる事が出来て、描き重ねの際

に出来るカサカサした画面に一応の色艶を取り戻せる事と、ヴェネシアン・ターペ
ンタインの様な強過ぎる光沢でもなく、温和な艶は、無理なく受け入れられるもの
だが、塗布後約1時間で乾燥するのも好都合だ。

只、この製品に限らず、既に何百年の実績を持つ、天然樹脂の安心感と、作られ
たばかりの合成樹脂系のメディウムは経験が浅い丈に不安は残るが、一応は現代科
学を信じて平行的に使用してみたい。

㊦ OIL VEHICLE No1 a オイル ビヒクル No1 a

これは亜麻仁油を太陽光線に当てて、脱色し、粘度が上り、濃く成ったものにテ
レピン精油を加えて、加工前と同じ流動性にしてあり使い易く、黄色くなる事もな
く、他の樹脂等と混ぜて使うのに便利である。

No. や記号の異なるものは、他の精油（ペトロール、ラベンダー油）やポッピーを
使用しているが、ポピーを余り信用しない私は、リンシードを元にし、テレピン油
を加えたこのビヒクル丈で今の処充分であるが、テレピン精油の代りに、ラベンダー
油を用いたものは、揮発が遅いので、早く乾くのを好む者としては、数種のビヒク
ルの中で当分の間、これ一つで間に合う良いメディウムと云い得る。

今迄作画に供したり、画布の切れ端に試験した溶き油、メディウム等は以上のも
のであるが、今後更に他の製品に及ぼしたいが、種々試みて強く思った事は、生の
オイル丈を使用する誤まり、クールトレのシッカチーフに対する必要以上の敬遠、
樹脂をもっともっと使うべき事、等であるが、私はメーカーでも、勿論専門家もこ
れらの特質を良く承知して居られる筈で、生のオイルで練った、しかも明らかに油
量の多過ぎる、素人用の絵の具丈を発売する丈でなく、硬いコーパル樹脂を用い、
それにベネツィア・テレピンを加え、或いは又、スタンド・オイル（亜麻仁油製）
も加える等し、更に重要なのは、クールトレのシッカチーフを3%~5%添加する
事で制作時の画面の乾燥が快適に成るばかりか、絵の具の下層部分から順々に乾く
と云うのは油画のマティエールの上で、その健康上大切な事を認める必要があり、
真の意味での専門家用油絵具を製造発売してほしいと思うのは、一人私丈ではない
と思う。

現にチューブに含まれている無意味な生のオイルを抜き去る為に、新聞紙や画用
紙の上に、(吸取紙は紙の繊維が混入するので不可)油絵具をしぼり出し、数分後に

樹脂等と練り直して制作に使用している作家が多いが、彼等はメーカーに失望しているわけであるが、最初から、樹脂や、加熱した油、乾燥材で練り合はされた絵の具が製造発売されるならば、多くの人々が使用しだすのは火を見るより明らかだと思はれる。

問題は、メーカーでは、製造した油絵具が使用される前にチューブの中で固化しはせぬかとの危惧だろうが、それは杞憂に過ぎない。

私はイギリス・ニュートン社のアンダーペンティング・ホワイトを1年前に購入したものを、キャップを取りはずして、しばらく出すと購入時と全く同様に使い得る経験があるが、この製品は重合性リンシードで練っており、制作時に次第に乾燥しつつあるのが分る位の良好な乾燥性があるのだが、キャップをしっかり締めつけてさえおけば、使用可能である事を示している。

又我国の松田画荘 K.K. では10号チューブ容りの速乾性の油絵具を製造販売して居り、ウィリジャンやコバルト・ブルー等はチント丈なので、学生用、習作用かと思はれるが、薄塗りの画面は、1日で指觸乾燥する製品だが、キャップを締めたチューブは3年前に購入した製品が、全く何の支障もなく、使用感は普通の油絵具と同じである。

ルフラン社のメディウム・フラマンやメディウム・ヴェネシアンは油絵具と等量程度混ぜて使用すると、作画時に、もう乾きつつあるのが分る程、乾燥が早く、(鉛の成分や、加熱したリンシードの性質上)1日で指觸乾燥するが、これとて、キャップを締めおけば決して心配はない。

乾燥が極度に早いメディウムが、顔料と練り合わされても、空気に觸れなければ、即ち空気中の酸素と遮断しておけば、所謂酸化しないわけだから、決して乾燥・固化は起り様がなく、何年かは絶対に乾く事はない。

各メーカーは此の点に着目し、極めて良質で、且乾燥が早い、真の専門家用油絵具を1日も早く製造販売して、画家に生のオイルを抜き、樹脂や加熱油を加えて絵の具を練り直す等の労力・無駄な時間から解放して呉れる事を望むや切なるものがある。勿論野外写生や旅行の場合を考えたり、乾燥を早めてあるので6号チューブ等の小さいものを主にした方が良いのは云う迄もない。

▶マティエールの病気・災害

今迄の記述で、油画の画肌の損傷等は、如何なる情況で起るものかは分る筈であるが、具体的に種々の例を挙げて見たい。

亀裂——前記、安井曾太郎の「金容」に生じた亀裂は、下層の絵の具が充分乾き切っていないのに、その上層に絵の具を塗り重ねたと云う事であるが、この理由は正しいのであろうが、その外に乾性油は、酸化乾燥の際にその重量は増加するが、体積は減ると云う事で、オイルの使用量が顔料に対して、必要以上に多過ぎる事が上記の理由に重なって亀裂を起したものと思はれる。

又、下層に厚く絵の具を盛り上げ、その上に、薄く絵の具を乗せても亀裂するので、画家の顔みみたいな厚いタッチは、最後にした方が良さそうである。これは上層の油の膜が先に乾いて出来て、下層の厚い層がおくれて徐々に乾燥・収縮する為の亀裂と云える。

もう一つの亀裂の原因はパンドル等の樹脂が、良く絵の具と練り合されない事から起る不均一な収縮が原因の事があり、折角の良質樹脂が、使用法のあやまりから、見放される愚かさである。ケシ油の吸収性の強さが、上層の絵の具の収縮を起し、亀裂する事も多い。亜麻仁油の方が吸収性が少く、良質である。

ジंक・ホワイトの厚塗りや、キャンヴァスを巻いた為の亀裂は、当然起るべき事で、キャンバスは巻く為に出来たものではなく、画面の大きなサイズを得る為であり、欧州の心ある画家は、しっかりした板に画布を貼って作画している。

画布を巻くのは薄塗りで、完全に乾燥する前の一時期丈に限られるべきだろう。

剥落——絵の具がとれてしまうのは、巻絵の際に起き易いが、木枠に貼った儘でも剥落は起り得る。

下層の絵の具が充分乾燥して、その表面に油の膜が出来て、つるつるの状態の処に加筆されると、上層の絵の具が固着し難く、滑り易く、剥落する。

特にナイフ描きをする場合に、平滑な画肌は、スケート・リンクと変らぬ状態と思はねばならない。

剥落を防ぐ為には、ヴェルニ・ア・ルッセーを使用する事で、いとも簡単に解決される

艶引け——その絵の具丈、単独に画面に塗布してもチョーキングし易い、チタ

油画のマティエール(山川義夫)

ニューム・ホワイト，コバルト・ブルー，オキサイド・オブ・クロミウム等は，ヴェツィア・テレピンや，加熱重合したリンシード・オイルの使用で防ぐ事が出来るが，如何なる顔料でも，生乾きの絵の具の上に加筆すると，カサカサした感じになるが，これは絵の具が乾く時に，酸化した油がガス状に成り，絵の具の層に無数の小さな穴をあけ，脱出し，又酸素を入れるのに役立て，乾燥が続行されるが，そこに加筆された絵の具の油が乗せられると，沢山ある小穴から上層の新しい油を吸収して，下層部分がふくれ上がる。この為に上層の絵の具の油が不足して，カサカサした画肌に成るもので，この災害もヴェルニ・ア・ルツセーを毎日使用する事で避ける事が出来る。ただし，使用した練り合せ剤と同じ組成のものを出来る丈用いた方が良いと思う。